

いなかおか



1999 No.134

東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅 -VI

下馬部会 齋藤賢一

あの素晴らしいアンコールワットを見学して、その興奮がおさまってくると、この建物はクメール人のオリジナルなのか、それともインドにルーツがあるのか確かめたくまりました。そこでまずインドに旅立つことにしましたが、インドはあまりにも広くどこへ何を見に行ったらよいのかわかりません。アンコールの遺跡が建立されたのは9～13世紀、インドネシアの遺跡は少し古く8～12世紀頃までなので、インドで石積み寺院が造られた6世紀頃から12世紀までのインド建築を調べました。その結果、インド建築には大きく分けると北型と南型のふたつの形があることがわかりました。北型は北インド（ムンバイより北）に多く、寺院の本殿の屋根（シカラ）が砲弾型となっており、上方に高くそびえます（写-1）。



写-1「北型寺院」パールシュラメーシュヴァル寺院
南型は南インド（ムンバイより南）に多く、本殿の屋根はピラミッド状になっています（写-2）。今回は北型の寺院を見学したいと思います。この北型寺院の代表はインド洋に面したオリッサ州のブヴァネーシュヴァルとデカン高原にあるマディヤ・ブラディシュ州のカジュラホです。

ブヴァネーシュヴァルはカルカッタの南にあり、オリッサ州の州都です。この町に最盛期に



写真-2「南型寺院」カイラサナータ寺院

は7000ものヒンドゥー寺院があったといわれ、現在でも500近くが残っています。この町は近代的な新市街と下町情緒のある旧市街に分けられ、寺院は旧市街にあるビンドゥーサーガル湖の周囲に集まっています。

まず一番古く北型のプロトタイプとなったパールシュラメーシュヴァル寺院へ行きます。650年に建立されシヴァ神を祀る寺院です。本尊を祀る高塔の本殿とその前に続く広間を持つ前殿から出来ています。この寺院の特徴は、空白を恐れるように建物すべてを覆う彫刻です。簡素な形態をしており、本殿の高塔もあまり高くなく、前殿の屋根も平らです（写-1）。前殿の屋根は時代が経るとともにピラミッド型になっていき、本殿の高塔も高くなってきます。インドの寺院ではどこでも境内では靴をぬがなければなりません。直射日光のあたっている境内はとても熱く、裸足では一歩も歩けませんので綿の厚い靴下が必要品です。また革製品を身につけていると、境内に入れない場合がありますので革のベルトやバックに注意しましょう。

次にヴァイタルデウル寺院へ行きます。この寺院は本殿の屋根がかまぼこ型を呈し、バラ色をした独特の雰囲気を持った寺院で、壁龕に彫刻されたドゥルガー女神（遺跡の旅-III参照）

と高塔に彫刻されたシヴァ神—ナタラージャ（遺跡の旅—Ⅲ参照）が素晴らしい出来です。前殿の屋根は平らです（写—3）。



写真—3
ヴァイタルデウル寺院

ムクテーシュヴァル寺院は10世紀中頃に建立され、全体に洗練された、調和のとれた寺院です。正面にあるアーチ型の門は珍しく、ここに彫刻された天女像はとても魅力的です（写—4）。



写真—4「門の天女像」ムクテーシュヴァル寺院
前殿の屋根はピラミッド型になります。また窓枠に彫刻された猿とワニの昔話もおもしろく、全体に仏教の影響を受けたと言われています（写—5）。



写真—5 ムクテーシュヴァル寺院

11世紀のはじめに建立されたリンガラージャ寺院は巨大な寺院で、本殿の前に前殿がありその前に踊りなどを奉納する歌舞殿があり、更にその前に供物殿があります。従って奥行き of 全長は70mにおよび、本殿のシカラも著しく上昇し45mに達します。そしてこの主堂以外にも境内には60余りの付属の堂があります。残念なことにヒンドゥー教徒しか中に入れないので、観光客は外壁の横にある台の上から眺めるだけです（写—6）。



写真—6 リンガラージャ寺院

ここから車で1時間のベンガル湾沿いにヒンドゥー教有数の聖地プリーがあります。インド全国からの巡礼者がこの聖地にあるジャガンナート寺院を目指してやってきます。この寺院はオリッサ州最大の寺院でリンガラージャ寺院よりも大きく、もちろんヒンドゥー教徒以外は入ることが出来ません。観光客は寺院の周りがあるホテルやレストランなどの屋上からお金を払って見学するのです（写—7）。



写真—7
ジャガンナート寺院

6～7月頃に行われるラタ・ヤートラ（山車の祭り）というお祭りでは本尊の3神（ヴィシ

ユヌとその兄弟)が数千人が引く巨大な山車に乗って町を練り歩きます。そしてこの山車に轢かれて死ぬのが最高の幸せと信じて、以前は多くの人が車輪の下にわが身を捧げたそうです。プリーの海岸は巡礼者が沐浴に集まりますのでホテルが沢山あります。プリーのお勧めのホテルはS.E.RAILWAY HOTELというイギリス植民地時代からの由緒あるホテルです。建物はもう古くなってしまいましたが、早朝のモーニング・ティーやアフタヌーン・ティーを当時のままの制服を着たインド人のおじさんが部屋まで持ってきてくれ、とても雰囲気のあるホテルです。また目の前が海岸ですので海水浴にはとても便利です。



写真-8 スーリヤ寺院



写真-9 「基壇の車輪」スーリヤ寺院

プリーから30kmほど東へ行ったコナラクという松林に囲まれた小さな村にスーリヤ寺院があります。13世紀の寺院で現在残っているのはピラミッド型の屋根を持つ堂々たる前殿とその前方に独立して建つ屋根を失った歌舞殿だけです。失われた本殿のシカラは70mを越えると言われています(写-8)。この寺院はスーリヤ神(太陽神)を祀っており、寺院全体がスーリヤ神の乗り物である7頭だての馬車に乗っているように建てられています。すなわち、基壇に

は馬と12組24個の車輪が彫刻されているのです(写-9)。そしてこの前殿の壁は女性像とミトゥナ像(男女交合像)で埋め尽くされています(写-15、16)。この小さな村を世界的に有名にしているのがこのミトゥナ像なのです。コナラクは本当に小さな村ですが、とてもものんびりしており、スーリヤ寺院も夜、ライトアップされとても美しいので是非一泊したい村です。高級ホテルはありませんが、寺院のすぐ前にトラベラーズロッジがあります。エアコンがなくシャワーも水だけです。松林を抜けてくる風がとても気持ちよく、また隣のレストランのロブスターのカレーが最高です。

さてもう一つの北型の代表寺院カジュラホはインドのほぼ中央にあり9-13世紀頃中部インドを支配していたチャンデーラ王朝の都として栄えていました。当時は85もの寺院が在りましたが、現在は22の寺院が残っています。カジュラホ寺院の特徴は高い基壇でオリッサの寺院ではほとんどなかったか、あってもとても低かった基壇が高くなってその上に建物がそびえています。寺院は入り口、前殿、本殿が一直線上につながっており、バルコニーや広いポーチもあり、内部は彫刻で装飾されていますがオリッサの寺院では入り口、前殿、本殿が個別に仕切られ、バルコニーはなく内部の装飾はほとんどありません。カジュラホの寺院は西群、東群、南群の3つに分けられ、有名な寺院はほとんど西群にあり、観光客は西群だけ見学して帰ってしまいますが、ぜひ2泊してゆっくり見学したいと思います。人口6500人のカジュラホですが、最高級のホテルがいくつもあります。



写真-10 ラクシュマナ寺院

まず西群のラクシュマナ寺院へ行きます。950年建立の一番古い寺院ですが原型のまま残されている一番魅力的な寺院です。形は5堂型で基壇の四隅に小さい副詞堂が建っています(写-10)。彫刻とくにミトゥナ像が有名です。

カンダリヤマハーデーヴァは一番大きな寺院で本殿のシカラは40m以上あります。本殿のシカラが最も高くその次に前殿の高塔、そして玄関にも二つの高塔を乗せているので山脈の様に見えます。これはシヴァ神の住居があるカイラーサ山(ヒマラヤにあると言われている)を本殿のシカラに見せ、その周囲を山で囲まれているように造ったと思われます(写-11)。



写真-11 カンダリヤマハーデーヴァ寺院

東群のパールシュヴァナータ寺院はジャイナ教の寺院で規模は小さいが極めて完成された建築美を誇っています。この天女の彫刻は美しく有名で、妖艶さに欠けませんがカジュラホで一番という人もいます(写-12)。アディナータ寺院もジャイナ教の寺院で建物はシンプルですっきりしていますがやはり天女が美しく彫刻されています。



写真-12「天女像」パールシュヴァナータ寺院

カジュラホ寺院の最大の見所は、壁面の彫刻です。ヒンドゥー神と神妃、スラスンダリー(天女)、ナーイカー(貴婦人)、アプサラ(天女)、ヤクシーなどと呼ばれる女性像、そしてミトゥナ(男女交合)像です。これら壁面を飾る女性は体をくねらせ、豊満な肢体を誇ったり、鏡を持って化粧したり、恋文を書いたり、水浴からあがって髪をしぼったりしてとても魅力的です。特に重要なのはミトゥナ像です。ミトゥナ像で有名なのはコナラクのスーリヤ寺院とカジュラホの寺院(西群)です(写-13、14、15、16)。



写真-13「ミトゥナ像」ラクシュマナ寺院



写真-14「ミトゥナ像」カンダリヤマハーデーヴァ寺院

なぜこのような男女の交合の彫刻が寺院の壁に彫られているかはよくわかりません。インドでは生活の根底に輪廻があります。輪廻とはすべての生物は様々な境涯に生まれ変わり、生死を繰り返すことで、生前の行いの結果が今ある自分であり、現世の行いが来世につながり



写真15 「ミトゥナ像」スーリヤ寺院



写真16 「ミトゥナ像」スーリヤ寺院

ます。どんなものに生まれ変わるかわからないのでとても不安です。したがってこの輪廻を断ち切って永遠のやすらぎが欲しいのです。この考え方はヒンドゥー教、仏教共に同じです。これには苦行をして欲望を退けることによって輪廻から解放される方法と、肉体や性欲を神聖なものとして否定するのではなく、逆にそれを積極的に行き出し、高めることによって輪廻から解放される相反する方法とがあります。この後

者の方法は昔から存在していたのですが、特に7、8世紀頃から流行しました(タントリズム)。このような観念のもとにオリッサやカジュラホの寺院において考えられる限りの交合のポーズが彫刻されたのではないのでしょうか。この事はヒンドゥー教だけではなく大乘仏教において日本にも理趣経や真言立川流として伝わっています。オリッサのミトゥナ彫刻は野性的で土着的な感じですがカジュラホの彫刻は洗練され、ソフィスティケートされています。この彫刻の違いは寺院がもし出す雰囲気と同じでとても興味深いものがあります。

今回北型の寺院を見学しましたが、あのアンコールワット寺院などのプロトタイプと思われるようなものはありませんでした。しかし、アンコールワットの塔は北型のシカラに大変よく似ていますし、中央祠堂を取り囲む四隅の副祠堂がつくる5堂型もアンコール寺院との関係が考えられると思います。また、アンコールワットの壁面を飾る天女像や女神像も、ミトゥナ像はありませんが北型寺院の女性像との関係が考えられます。アンコールの寺院の女性像はインドの寺院の女性像と比べると一見同じ様なポーズや表情をしておりますが、よく観察すると表情も千差万別で装飾品も同じものはありません。インドの女性像はとても豊満で成熟した女性の魅力を持っています。それに比べてアンコールの女性像は、コケティッシュで未成熟な魅力を持っており、このことは現在のインド女性とカンボジア女性にそのままあてはまります。

次回は南型の寺院を見学し、アンコール寺院との関係を調べたいと思います。